

事後評価報告書

(ベルモント・フォーラム:「持続可能性のための北極観測と研究」領域)

1. 研究課題名: 「気候変動下における北極海洋システムの回復力と適応力」

2. 研究代表者名:

日本側: (北海道大学)(北極域研究センター)(センター長・特任教授)(齊藤 誠一)

相手側1: (アラスカ大学)(水産海洋学部)(准教授)(Mueter, Franz)

相手側2: (ノルウェー国立海洋研究所)(海洋気候部門)(主任研究員)(Drinkwater, Kenneth)

3. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

北極海洋システムに関する概ね計画通りの成果をあげ、学術論文が積極的に出版されている。とくに、国際チームとして共同で出版したICES Journal of Marine Science 誌の特集号(Ecosystem Studies of Subarctic and Arctic Seas)は、この3回の国際ワークショップや国際会議などで議論された課題を丁寧に指摘するもので、高く評価できる。

ただし、将来の気候変化に対する順応的管理能力に関する議論、気候変動下における北極海洋システムの回復力と適応力の評価など、具体的な研究成果が報告書から読み取れない。また、ステークホルダーとの協働がどのように効果をもたらしたかについても、具体的な説明がほしかった。

(2)交流活動の評価について

予算が限られる中で、日本、米国、ノルウェーの既存の研究成果を発表する国際ワークショップを3回開催するとともに、ステークホルダーとの会合も2回開催し、環北極海全域の海洋生態系の統合的理解に関する研究ネットワークを確立した。また、若手研究者や大学院生を国際会議やワークショップに出席させることで、人材育成も期待できる。

ただし、社会科学研究者やステークホルダーが国際ワークショップに参加したことの効果や、構築されたネットワークを利用した今後の研究方向、具体的な取り組みなどが報告書からは読み取れない。

(3)その他

中央北極海での無規制公海漁業防止協定に関わる基本合意や、北極海洋生態系のモニタリングの重要性が認識された点は、このプロジェクトの相乗効果としてみとめてよいと思われるが、そうした因果関係が明確になることが望ましい。